

横井小楠と李退溪『自省録』

— 学問の本領を合点させた書 —

北野雄士[†]

Yokoi Shōnan and *Jiseiroku* (自省録) by Yi T'oegye: A Deeper Understanding of Confucian Learning Achieved through *Jiseiroku*

KITANO Yuji

Abstract

Jiseiroku (自省録, Meditations), by the Korean neo-Confucianist Yi T'oegye (1501-1570), influenced Japanese Confucianists in the Tokugawa period, such as Yamazaki Ansai (1618-1682) and Otsuka Taiya (1677-1750).

Yokoi Shōnan (1809-1869), a Confucianist and samurai from the Kumamoto domain, was deeply moved by this book and claimed Yi T'oegye to be one of two true Confucianists since Zhu Xi (1130-1200) and highly recommended its reading.

I have attempted in this paper to examine the influence of *Jiseiroku* on Shōnan's thought in his thirties and early forties, and his following discourses and way of life.

I introduce the thought of Otsuka Taiya, a neo-Confucianist also from Kumamoto, because he, too, was impressed by *Jiseiroku* and respected by Shōnan. Shōnan read the writings and analects of Taiya and laid the ground for the adoption of T'oegye's stoic discipline and departure from worldly interests.

I conclude that, for Shōnan, Yi T'oegye was not only the model for the Confucian

[†] 大阪産業大学 国際学部国際学科 教授

草稿提出日 11月15日

最終原稿提出日 1月8日

way of life in the face of adversity, but also an example for self-cultivation leading to a freedom from worldly interests.

キーワード：横井小楠，李退溪『自省録』，学問の本領，一切の利害の度外視

はじめに

李退溪（名は滉，字は季浩，後に景浩，退溪は号の一つ，1501-1570年）は16世紀朝鮮の朱子学者である。その著作は江戸時代の日本に伝来して，日本の儒者が朱子学を受容するきっかけになった¹⁾。例えば，山崎闇斎（1618-1682年）は李退溪の『自省録』を読み，己も「感発興起」²⁾しなければならぬと思ったと述べている。また江戸中期の熊本藩士で儒者の大塚退野（1677-1750年）は『自省録』を読んで，陽明学をやめて，朱子学に転じた³⁾。その後，退野は致仕した頃，久しぶりに『自省録』を読み返して「ますます退溪の学の至り測るべからざると存じ奉り候」⁴⁾とその感想を述べている。

幕末の熊本藩士の横井小楠（名は時存，字は子操，小楠は号の一つ，1809-1869年）も，『自省録』の一節を読んで深い感銘を受けている。このことは，小楠が嘉永2（1849）年11月，自らの私塾に20日間滞在して帰省する福井藩士の三寺三作^{みつでらさんさく}に対し，別れの言葉として『自省録』の次の一節⁵⁾を書き贈っていることから分かる。

1) その事情は阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会，1965年，及び阿部吉雄「江戸期の儒書に引用された李退溪「自省録」」『日本中国学会報』第20集，1968年10月が詳しい。

2) 山崎闇斎「白鹿洞学規集註序」日本古典学会編『山崎闇斎全集 上巻』松本書店，1936年，67頁。闇斎がそう思ったのは，『自省録』に収録されている書簡によって，『白鹿洞規集解』（朝鮮の朴松堂が朱子の「白鹿洞書院学規」を改訂した16世紀半ばの書籍）の内容を巡って，李退溪が門人と手紙をやり取りして真剣に議論していることに感心したからである。

3) 「退野先生語録」『孚齋存稿』卷三（無窮会所蔵 和本）。

4) 古城貞吉編『肥後文献叢書』隆文館，1910年，644頁。

5) 野口宗親『横井小楠 漢詩文全釈』熊本出版文化会館，2011年，529頁。本文中に引用した書き下しは野口に依っている。山崎正董『横井小楠 遺稿篇』明治書院，1938年，723頁。この一節は，李退溪（難波征男校注）『自省録』平凡社（東洋文庫864），2015年，24-25頁にある。ただし，小楠の引用は『自省録』の本文とは少し異なっており，『自省録』本文では「榮辱」の後に「利害」が入り，「已に」の前に「蓋し」^{けだ}がある。他は同じである。難波征男の『自省録』校注は，本文，和訳を掲げるとともに，李退溪が書簡を送った相手の履歴や李退溪との関係，書簡に引用された言葉の典故，『自省録』が日本の儒者に与えた影響などを解説したものである。この『自省録』校注の本文は，阿部吉雄編『李退溪全集 日本刻版』上 李退溪研究会，1975年，321-363頁に収められたものと同一である。

李退溪曰く、第一須らく先づ世間の窮通・得失・荣辱を將て一切之を度外に置き、以て靈台を累わさざるべし。既に此の心を弁え得れば、則ち患うる所已に五七分は休歇せん。

小楠はこの一節⁶⁾に続けて、小さな字でこの言葉を贈る理由を次のように書き添えている。

学ぶ者当に先ず本領を立つべし。本領既に立てば居る可きの処有り。謂う所の本領は此の一言に在り。而して真心に修養して洒然として脱却すれば、則ち順境逆地にも適して泰然たらざるは無し。是れ学の本領を立つるを貴ぶ所以なり。（後略）

世間の一切の利害を度外視して心（靈台）を煩わせなければ、患うところはかなり消えてしまうという李退溪の言葉は、一言で学問の本領を言い当てているという主旨である。

また、小楠は三寺三作に上述の言葉を贈る3か月前の8月、久留米藩教授の本庄一郎への書簡⁷⁾の中で、朱子以後の「古今絶無之真儒」として、明の薛文清（1389-1464年）と李退溪を挙げ、それぞれの著作である『読書録』と『自省録』は、朱子学を学ぶ者が必ず心得ておかねばならない書物であると述べている。

小楠と李退溪の関係、およびそれに関連する問題はすでに、いくつかの研究論文の中で言及されている。まず、楠本正継は論文「大塚退野並びに其学派の思想－熊本実学思想の研究」⁸⁾（1957年）の中で、熊本朱子学派の祖である大塚退野が朱子学を受容する上で、李退溪から多大な影響を受けたことを指摘した上で、小楠が退野の文章や語録から大きな影響を受けたこと、さらに、一切の利害の度外視によって、心が主宰となるような内面の工夫を重んじる李退溪の思想が、退野を経て幕末の横井小楠にまで及んでいると述べている。

次に、阿部吉雄は著書『日本朱子学と朝鮮』⁹⁾（1965年）において、楠本のこの論文を引

6) 前掲『横井小楠 漢詩文全釈』、529頁。前掲『横井小楠 遺稿篇』、723-724頁。小楠は嘉永4（1851）年9月、弟子の徳富一敬が小楠の塾を辞して郷里に帰る際にも、本文に引用した『自省録』の一節に、三寺に贈ったものとはほぼ同じ内容の言葉を添えて、書き与えている。同『横井小楠 遺稿篇』、724頁。

7) 同『横井小楠 遺稿篇』、130頁。

8) 国士舘大学附属図書館編『楠本正継先生 中国哲学研究』、1975年（初出は楠本正継編『九州儒学思想の研究』、1957年）、639-668頁。

9) 前掲『日本朱子学と朝鮮』、473-477、479-484頁。

用しつつ、李退溪が大塚退野や横井小楠に与えた影響を考察しているが、その所説は楠本の解釈とほぼ一致している。阿部はさらに、論文「江戸期の儒書に引用された李退溪「自省録」」(1968年)¹⁰⁾で、『自省録』が日本でどのように伝来して刊行され、山崎闇斎やその門下、退野や小楠らによってどのように引用されているかを文献学的に紹介している。

平石直昭の論文「主体・天理・天帝(一)——横井小楠の政治思想」「主体・天理・天帝(二)——横井小楠の政治思想」¹¹⁾(ともに1974年)は、ある時期朱子学を慕う者と自認していた小楠の思想と朱子の思想との相違点と共通点を分析し、小楠の儒教思想の体系と発想の独自性を明らかにしようとしたものである。その論述の過程¹²⁾で、平石は、李退溪が小楠に与えた影響について、小楠は、「義理」は極まりないものであるから、人は絶えず朋友と切磋して自己の所見を相対化させてゆかねばならないという考え方(「朋友講学」)を、李退溪から受容していると述べている。

友枝龍太郎の論文「横井小楠と朱子学(1)」(1976年)、「横井小楠と朱子学(2)」(1977年)¹³⁾は、30歳から40代後半までの小楠の漢詩文、メモワール、政策論に基づいて、小楠が受容した朱子学がどのような特徴をもつかを論じたものである。友枝の論旨は楠本の見解と同趣旨であり、『自省録』は、小楠に俗世間の価値評価を捨てよと迫り、これによって小楠は「真心会得本領の合点」¹⁴⁾を得たと述べている。

小楠と李退溪の関係に関して、これまで指摘されてきたことをまとめれば、①小楠が、李退溪を尊崇した大塚退野に大きな影響を受けたこと、②小楠が李退溪を「真儒」として高く評価し、様々な利害に心を煩わさない工夫を強調する『自省録』の一節に学問の本領があると考えていたこと、③朋友との絶えざる意見交換によって自分の見解を相対化し、偏った私見に陥らないように努める姿勢を学んだことである。

以上の①、②、③の指摘は、大塚退野の文章や語録、小楠の詩文、『自省録』などに照らして妥当である。

本稿は、以上の研究のような熊本朱子学派の思想史や小楠の朱子学理解ではなく、小楠の思想の形成・発展過程に視点をおいて、『自省録』との出会いが小楠にとってどのよう

10) 前掲「江戸期の儒書に引用された李退溪「自省録」」, 192-202頁。

11) 平石直昭「主体・天理・天帝(一)——横井小楠の政治思想」東京大学社会科学研究所『社会科学研究所』第25巻第5号, 1974年3月, 「主体・天理・天帝(二)——横井小楠の政治思想」東京大学社会科学研究所『社会科学研究所』第25巻第6号, 1974年3月。

12) 同「主体・天理・天帝(二)——横井小楠の政治思想」, 85頁。

13) 友枝龍太郎「横井小楠と朱子学(1)」『韓』第5巻第5・6合併号, 1976年6月, 「横井小楠と朱子学(2)」『韓』第6巻第6号, 1977年6月。

14) 前掲「横井小楠と朱子学(1)」, 131頁。

な意味を持ったかを考察しようとするものである。その際、『自省録』による本領の合点の素地は、李退溪から大きな影響を受けた大塚退野の文章や語録に小楠が親しんでいたことによって、養われた可能性を考慮しておく必要がある。

以下、第一章では、まず『自省録』の内容を概説しつつ、李退溪がそれを著した意図を考える。第二章は、楠本や筆者の論文¹⁵⁾に基づいて、小楠が大塚退野から受けたと考えられる影響をまとめる。その上で第三章では、小楠が30代から40代初めにかけての時期に『自省録』を読んだことが、思想を形作っていく上で、さらに生きる上で、どのような意味をもち、どのような影響を与えたかを考察したい。

本論に先立ち、小楠は大塚退野の文章や語録と『自省録』のどちらを先に読んだのかということに触れておこう。小楠が初めて大塚退野に言及しているのは、後述する弘化2（1845）年4月、37歳の年に同志に進呈した「感懐十首」の中の漢詩¹⁶⁾においてである。その第六首は「吾は慕う退翁学、学脈淵源深し」（退翁は退野のこと）で始まっていて、小楠が弘化2年の頃までに、退野の文章や門人が記録した語録に親しんでいたことが分かる。初めて『自省録』に触れているのは¹⁷⁾、嘉永2（1849）年8月に出した前述の本庄一郎宛の書状である。さらに同年の11月に、先に引用した『自省録』の一節を三寺三作に書き贈っている。また、『自省録』の書名は出されていないが、弘化3（1846）年8月に書かれた文章¹⁸⁾の中に、前述の『自省録』の引用にかなりよく似た一節がある。それは、当時小楠の門人の徳富一敬が小楠の策問に答えた文章の行間に小楠が朱筆で書き入れた批評であり、その中で「・・・世間窮通得失榮辱等一切の外欲実々度外のことに思い絶て此心を累らわさるゝことなし。」と書いている。大塚退野の文章や語録には『自省録』の前掲の

15) 筆者は次の論文で、小楠が高く評価した大塚退野とその弟子の平野深淵の思想、及び両者が小楠に与えた影響を考察している。「大塚退野、平野深淵、横井小楠—近世熊本における「実学」の一系譜—」『大阪産業大学論集人文科学編』第107号、2002年6月（雑誌『別冊 環』第17号に「近世熊本における朱子学の一系譜—大塚退野、平野深淵、小楠」と改題し、大幅に改稿して掲載、藤原書店、2009年11月）。

16) 前掲『横井小楠 漢詩文全釈』、151頁。

17) 前掲『横井小楠 遺稿篇』、130頁。

18) 同書、944頁。

一節と同趣旨の文章¹⁹⁾はあっても、下線部のような表現は使われていない。『自省録』の書名は出てこないが、弘化3年の時点で小楠が『自省録』を読んでいた可能性がある。

結局文献の上では、どちらを先に読んだかを確定することはできないが、退野の文章や語録を読み、そこに出てくる『自省録』を手にとったと考えるのが自然だろうと筆者は考えている。

第一章 『自省録』の内容と編集の意図

『自省録』は、李退溪が門人や知友(すべて年下)の書簡に対する自らの返信を取捨選択してまとめたものである。門人や知友の相談は、出处進退、学業継続の悩み、家族の葬祭儀礼、朱子学の解釈など多岐にわたっている。最初の返信は、朝鮮の士人の出处進退²⁰⁾の困難さと学問をする上での心の工夫を述べ、最後の返信は、官界に出仕した士人の生き方と学問をする上での心構えを説いており、呼応している。李退溪が58歳のときに自ら編集し、没してから15年後に弟子によって出版された。

収められている各書簡は、後進の朋友を励ましたり戒めたりしつつ、質問に対して懇切丁寧に答えている。それぞれの書簡は、一つ一つの物事に即してその理を窮めていく、朱子学の「格物」(朱子の『大学章句』²¹⁾は「格」を「至」と解する)の実践例にもなっており、その過程で、「敬」や「理」などに関する朱子の思想が分かりやすく説かれている。中心的な主題は、第一に、当時の状況下で、士人はどのように出处進退を行えばいいのか、第二に、そのためにはどのような工夫をして、心を保ちながら学び続けていけばいいのか、という問題である。

19) 大塚退野は「諭友(友をさとす)」と題した文章の中で、「己の為」の意味を説明する際に「・・・その初めにおいて身外の事、栄衰休戚毀誉得喪、一切之を度外に置き、その心に容れず、まさにその己に在るものの何物たるかを見るべし」と述べたり、「体験説」の中で、「此の信心立ち候者は世間の毀誉得喪貨色生死その障礙をなすこと能わぬ位之有り候」と述べたりしている。それぞれ前掲『肥後文献叢書』、600、612頁。また、書簡においても、「体験説」とほぼ同じ表現を用いている。同書、672頁。

20) 李退溪が編纂した『朱子書節要』の第一巻、第二巻は「時事出处」と題して、出处進退に関する朱子の書簡を集めている。朱子は『朱子書節要』第一巻に収められた書簡の中で、出处進退について、「士大夫の辞受出处はまた独りその身の事のみにあらずして、その処するところの得失すなわち風俗の盛衰に関わる」と述べ、出处進退を重んじている。阿部吉雄編『朱子書節要』『李退溪全集 日本刻版』上巻、李退溪研究会、1975年、18頁。なお、楠本正継は、この『李退溪全集 日本刻版』に収められている『朱子書節要』の訓点は大塚退野によって付せられたものの写しであると推定している。

21) 金谷治訳注『大学・中庸』岩波書店(ワイド版 岩波文庫)、97、104頁。

まず、出处進退に関する退溪の考え方から紹介しよう。当時の朝鮮には科挙制度があり、合格すれば出世の道が開かれるものの、士人間の党争²²⁾は激烈であり、処世に関する士人の悩みは深かった。門人の奇大升（名は大升，字は明彦，号は高峯，1527-1572年，26歳年下で「四端七情」論争の相手）宛の書簡によれば²³⁾，当時の朝鮮の礼制は，科挙に合格して出仕した士人が辞職して隠居することを廃しており，また名声を得ている士人が，退職を希望すると激しい非難にさらされた。退隠していた李退溪も声望が高く，朝廷からたびたび召命があったが，持病もあったので辞退しようとするや厳しく非難された。この書簡の記述からは，科挙を受けることなく最初から学問に専念していればという退溪自身の悔恨の気持ち²⁴⁾も読み取れる。退溪は，科挙に合格して官僚になり，人々から期待されている奇大升が，辞職して学問に専念したいと書いてきたことに対して，一旦官職に就いた以上，辞めることは考えずに，職を続けながら学問してほしいと述べている。

次に，心を保ちながら学び続ける工夫として，退溪は，助長の戒め，一切の利害の度外視，日常の平易明白なことから理を窮めていくこと，朋友講学の勧め，「未発の敬」の工夫を説いている。以下それぞれの要点を説明しよう。

まず，李退溪は『自省録』の最初に，党争によって職を追われ，学問（陽明学）に専念していたが，その後官職に復帰できた南時甫（1528-1594年 名は彦経，字は時甫，号は東岡）の手紙に対する返信を収録している。退溪は，身辺の状況が改善したのに心が快活にならないと言う南時甫に対して，「助長」²⁵⁾という言葉を用いて，学問や道の実践において，成果を期待して急ぐことを戒め，悠々と着実に²⁶⁾歩めと述べている。

「助長」は、『孟子』²⁷⁾に出てくる言葉である。孟子は，弟子の公孫丑に対して，気を養うには，道義をとまなうことが大切で，気を養うことだけを目標として（^{あて}正にして）もいけないし，焦って無理をする（助長する）のもいけないと述べている。つまり，「^{あて}正にする」は，自分が求めている結果を性急に期待することであり，「助長」とは，成果を出そ

22) 李朝における党争については，岸本美緒，宮島博史『明清と李朝の時代』（世界の歴史12）中央公論社，1998年，107-111，257-267頁，小倉紀蔵『朝鮮思想全史』筑摩書房（ちくま新書），2017年，135-148頁を参照した。

23) 前掲『自省録』，315-317頁。

24) 同書，315-316頁。

25) 同書，22頁。助長という言葉は，177頁などでも使われている。

26) 同書，122，135頁。

27) 金谷治『孟子』（新訂中国古典選第五卷），朝日新聞社，1966年，85-86頁。なお，「正」は難波の書き下しに従い「あて」と読んだ。朱子は「孟子集注」で「正は預期なり」と注を付けている。「孟子集注」朱傑人，嚴佐之，劉求翔編『朱子全書』第6冊，上海古籍出版社 安徽教育出版社，2002年，283頁。

うと急いで無理をすることである。

次に、本稿の「はじめに」で引用した、一切の利害を度外視せよという言葉は、この助長の戒めの次に出てくる。退溪はその箇所で、一切の利害を度外視して心を治めれば、心の患いの半分から7割はなくなるだろうと述べている。

さらにこの後²⁸⁾で、自然に親しみ、書物の味わいを悦ぶとともに、道理を窮めるには日常の平易明白なことに即して看破し、己が知っていることにゆったりと心をあそばせることを勧めている。李退溪は世俗の利害から自由になることを求めているが、世俗から離れた高踏の境地を目指せと主張しているわけではなく、日常の生活から学んでいくことを繰り返し強調している。

朋友講学については『自省録』の随所で²⁹⁾、朋友と互いの見解を披歴し合い、議論することの益が説かれている。例えば、門人の黄仲举(1517-1563年 名は俊良 号は錦溪)が朴松堂の『白鹿洞規集解』に対する書評を送ってきた際の返信の中で、李退溪は、後輩や弟子が先輩や師の説を批判することについて、次のように述べている³⁰⁾。

弟子を以てして師門の書を議すること、以て嫌^{けん}と為さざるは、豈に義理は天下の公なるを以てするにあらざらんや。何れか先^{いず}、何れか後、何れか師、何れか弟なる、何れか彼、何れか此れ、何れか取り、何れか捨^すつる、至当に一にして、易うべからざるのみ。故に是の解や、其の門人の道理を識り是非を公にする者と与^{とも}に、其の特質を考論して、其の去るべき所を去り、其の存すべき所を存するを得て、改刊して以て世に行わば、則ち後学の幸いなり。

「義理」は天下の公なるものであるから、先輩か後輩か、師か弟子かに関係なく、議論してかまわないという趣旨である。退隠した退溪は自らの学問のためにも朋友との議論を歓迎した。老年になっても、朋友との切磋琢磨を好むところは、李退溪の謙虚で開かれた人柄を彷彿とさせる。

最後に、未発の敬の工夫に関する李退溪の考え方に触れておこう。退溪は朱子の修養

28) 前掲『自省録』, 24-25頁。

29) 同書, 136, 292, 400頁。同書の69頁では、「朋友講学」という言葉が使われている。

30) 同書, 292頁。

論を受け継ぎ、静と動において「敬」を貫く³¹⁾こと、特に意が発していない「未発」における敬の工夫を特に重んじていた³²⁾。これは、未発の静かな時に心を主に保って「天理の本然」³³⁾を涵養することである。退溪によれば³⁴⁾、この工夫を行うことで、意が発した動処（「已発」）において、次々と生起する事柄に対して、それぞれ落ち着くべき処に落ち着くように適切に対処できる（「節に中たる」）。未発時に敬の工夫を積んで本性（本来の善性）を涵養しておけば、已発時に人欲にとらわれることなく、一々の事柄にびたりと応じることができるというのである。敬の工夫は、「操存」、「莊敬涵養」、「居敬」などの言葉³⁵⁾でも表されている。この思想は朱子³⁶⁾に由来する。未発における敬の工夫は、それを強調する書簡が『自省録』に多く収められていることから、李退溪が『自省録』を編集して後世に伝えたかったことのなかでも特に重要なものと考えられる。

以上のように、『自省録』は年下の朋友たちに対して、士人はどのような心構えで出処進退を行えばよいのか、どのような心の工夫に努めて、利害に惑わされずに心を専一に保ち、日常の務めを果たしながら学んでいけばよいのかを伝えようとしたものである。後進を励まして学問を続けていくことを慫慂し、具体的な物事に即して朱子学の根本的な思想

31) 同書、164-165頁。「大抵、人の学を為すは、事有ると事無きと、意有ると意無きとを論ずること^な勿く、^た惟だ^{まさ}当に敬以て主と為して、動静失わざるべくんば、則ち其の思慮、未だ^{きざ}萌さざるに当たりてや、心体は虚明にして、本領は深純なり。其の思慮、^{すて}已に発するに及びてや、義理は昭著にして、物欲は退聴す。」

32) 小楠はこの点に関して、退溪とは異なり、未発の敬よりもむしろ意が発した已発における敬、さらに後には已発において意を誠にしようとする「誠意」の工夫を重視した。前掲『横井小楠 漢詩文全釈』、151頁。前掲『横井小楠 遺稿篇』、193-194頁。後者の引用箇所にある、嘉永6（1853）年5月7日付福井藩士の伴圭左衛門宛の書簡の一節では、已発の敬は、本心が発現したときに維持すべきものとして大切であるが、儒学を学ぶ者が「旧習」に惑わされて、言行ともに善をなしても、その心が真実でなく物事に切実に取り組めない場合には、心の内から引かれるものをきっかけにして始める「誠意（意を誠にする）の工夫」が欠かせないと書かれている。その際小楠は、誠意は敬に含まれると述べているから、誠意は已発における敬の工夫の一環ということになる。これは日々の現実の中で物事に取り組む場合の工夫であり、自発的な実践を重視する小楠の姿勢から生まれたものと考えられる。

33) 前掲『自省録』、181頁。

34) 同書、77-78、98、121頁。

35) 同書、93、94、121、135頁。

36) 「操存」の用例は、例えば「晦庵先生朱文公文集（三）」『朱子全書』第22冊、2208頁。「莊敬涵養」の用例は、例えば「晦庵先生朱文公文集（四）」『朱子全書』第32冊、3131頁。この箇所は「与湖南諸公論中和第一書」の一節であり、李退溪は前掲『自省録』の94頁で引用している。「居敬」の用例は、例えば「朱子語類」卷九『朱子全書』第14冊、301頁。

を解説した書であり、「朱子学のすすめ」とも言える書物になっている³⁷⁾。

第二章 横井小楠が大塚退野から受けた影響

本章では、小楠が大塚退野から、どのような影響を受けたかを考察する。熊本藩士で儒者だった大塚退野（名は久成、通称丹左衛門、退野は号の一つ）は、延宝5（1677）年に生まれ、寛延3（1750）年に亡くなった。小楠が生まれたのは退野の没後59年目である。

小楠は、退野が書き残した文章や退野の門人が書き留めた語録を読んだ。前述した嘉永2（1849）年8月10日付の本庄一郎への書状の行間に書き入れた注³⁸⁾で、やや詳しく退野を紹介している。

・・・初陽明を学び専心気を修養いたし良知を見るが如に是あり候。然れ共聖經に引合て平易ならず疑ひ思ひ候うちに、李退溪の自省録を見候て程朱之学の意味を曉り、年二十八にして脱然と陽明之学を絶ち程朱之学に入り申候。其の曉り候処は格致之訓にて有之候。退野天資の高のみならず修養の力格別に有之、知識も甚明に御座候間治国之道尤以会得いたし候。代々世禄の人にて候へ共時の否塞に逢ひ終に用られ不申。乍然老年に至り候ても国を憂へ君を愛するの誠弥以深切に有之真儒とも可申人物にて御座候。・・・拙子本意専此人を慕ひ学び候事に御座候。

ここでは、退野は「真儒とも申すべき人物」と称賛され、私淑していると述べられている。弘化2（1845）年4月に同志に送った、前述の「感懐十首」の第六首³⁹⁾でも、小楠は退野の学問を慕っていることを明らかにしている。

退野は引用にあるように、李退溪の『自省録』を読んで、程朱学（北宋の程明道、程伊川、南宋の朱子によって、宋学を代表させた用語）を志し、李退溪が編集した朱子の書簡のアンソロジーである『朱子書節要』の読解に長年取り組んだ儒者である。

退野の文章や語録に基づき、その思想をまとめてみよう。まず、退野は「体験説」⁴⁰⁾と

37) 『自省録』は後進の人々に対して、学び続けることと、そのための心の工夫を勧める普遍的要素も持っており、その意味では「学問のすすめ」でもあると言える。

38) 前掲『横井小楠 遺稿篇』、130-131頁。

39) 前掲『横井小楠 漢詩文全釈』、151頁。第六首全体は「吾は慕う退翁の学、学脈淵源深し。万殊の理に洞通して、一本此の仁に会す。進退は天命に任せ、従容として道心を養わん。嘆息す 百年の久しきに、伝習幾人か有る。」と詠まれており、同志に対して退野の学問の境地を目指していることを伝えている。

40) 前掲『肥後文献叢書』、609-613頁。

題した文章の中で、聖人の教えを学ぶにあたって、「信心」⁴¹⁾が何よりも重要であると言う。信心とは「聖人の教えを信ずるこゝろの骨に透りて二つなき味」である。この信心があつて初めて、学ぼうとする志が成り立ち、また「毀誉得喪貨色生死」⁴²⁾も妨げにはならなくなる。

さらに、退野は「体験説」の中で、「格物」という朱子学の中心思想を次のように説明している。万事万物には「理」が具わっている。この理は、「古往今来易らぬ処の私ならぬ条理」⁴³⁾であり、その運用は心の智覚に顕れている。聖人はその気質に人欲がなく理のままであるので、智覚は日々常に明らかで、日常の行為はすべて道にかなっている。衆人はその気質が人欲に引かれやすく、智覚は明らかでなく理を照らさないで、日常の行為も道にかなわない。『大学』の教えに従って、様々な事物の理を究めてゆけば、己の智覚も明らかになっていく。この工夫を間断なく続けてゆけば、脱然貫通の境地に至り、理と我が一体となって、本来の明德に立ち返ることができる。信心を厚くして、身に切なる聖人の言を守れば、善は日々生まれ、人倫は正しく国家も治平になることは必然である。

以上は「体験説」における「格物」の説明をまとめたものである。小楠が退野を紹介した前述の文章の中で、退野が暁^{さと}つたとされている「格致之訓」とは、『大学』の「格物致知」の教えのことである。退野は「格物」を朱子の解釈に従って「窮理」の意味に解している。

また、退野は、聖人の教えを信心し、人欲を排してもっぱら聖人の学を学ぼうとする態度を、「為己之学」⁴⁴⁾（「己の為の学」）という言葉でも表現し、学問のあるべき形として繰り返し用いている。「為己之学」は、『論語』憲問篇⁴⁵⁾に収録されている「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす。」という孔子の言葉に由来する。昔の学者は己の修養のために学んだが、今の学者は人に知られたいために学ぶという意味である。退野は「為己之学」について、「……凡学門の道は外なし為己のみ。夫草木は、帝土深山の別なく花開く時は花ひらけ候。学文も人の見る見ざる処にかゝわる処なく己がなすべき所をなし申はかりにて候。」⁴⁶⁾とかみ砕いて説明している。退野の「為己之学」は、人が見る見ない

41) 同書、612頁。小楠は信心という言葉は使っていないが、退野とよく似た考え方を、長岡監物（熊本藩の次席家老）宛の書簡の中で、聖人の道を学ぼうとする心が「真実底心に思」い入れたものでなければならぬというように述べている。前掲『横井小楠 遺稿篇』、124頁。

42) 前掲『肥後文献叢書』、612頁。

43) 同書、610頁。

44) 同書、600、604、606、609、611頁。

45) 金谷治訳注『論語』岩波書店（岩波文庫）、1999年、287頁。

46) 前掲『肥後文献叢書』、655頁。「学門」、「学文」はこの文献の本文による。

に関わらず、己がなすべきことをなして修養の糧にしようとする態度ということができよう。

「為己之学」は、朱子も重んじる学問の態度であった。朱子は「論語集注」⁴⁷⁾において、「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす。」という孔子の言葉に対する注の中で、聖賢が学ぶ者の「用心得失」を論じる説は多いが、この言葉ほど切にして要なるものはないと述べている。

退野は具体的な政策も論じている。退野の20代から70代にあたる17世紀末から18世紀の前半にかけて、熊本では、大風や洪水が頻繁に起き、蝗などの害虫の被害もあって、収穫高が大きく減少する年が多かった。それに伴い、年貢収入が減じ、その上幕府から命じられた河川修理などの出費が重なって、藩は財政難に陥っていた。時期は不明だが、退野は時の藩主の側近から、農民の耕作放棄に関する意見を求められ、それに対する上申書を書いている。そこでは、重税のために農民の耕作意欲が減退しているのであるから、まず相当な減税を行って農民の窮状を救い、農民の耕作意欲の回復を待つことが進言されている。しかし、退野の提言は採用されず、却って「否塞」の処分を受けている。小楠が退野を紹介する際に、「時の否塞に逢ひ」と述べているのは、このことを指すと考えられる。

以上のように、退野の学は、「信心」、「為己之学」の上に立ち、「治国平天下」を実現しようとする修己治人の学であり、仁政を理想とするものだった。

さて、小楠は退野からどのような影響を受けたのだろうか。筆者は以下のような理由から、その可能性が最も高いのは、「為己之学」の考え方ではないかと考えている。前述した本庄一郎宛の書簡は、朱子をどう読むかについての自己の見解を披歴した上で、朱子以降の中国、朝鮮、日本の朱子学者を取り上げ、その学者が学問する動機が、他者の評価のためか、己の修養のためかを厳しく問い、本庄に質したものである。その書簡では、「為己之学」であるかどうか、修養のための学問かどうかで⁴⁸⁾、真正の朱子学者かどうかを判定され、前述したように、李退溪はその基準にかなう「古今絶無之真儒」の一人であるとされ、退野も高く評価されている。「為己之学」は小楠の他の書簡⁴⁹⁾においても、講義や談話の際にも⁵⁰⁾強調されている。

47) 「論語集注」『朱子全書』第6冊、194頁。朱熹、土田健次郎訳注『論語集注4』平凡社（東洋文庫858）、2015年、74-75頁。李退溪は自ら編集した『朱子書節要』の巻二に、朱子が「為己之学」を重んじていることが分かる書簡を収めている。前掲『朱子書節要』、45頁。

48) 前掲『横井小楠 遺稿篇』、127、130頁。

49) 同書、123頁。

50) 同書、933、940、943頁。

また、前述のように、小楠は退野を、己を修め人を治める「修己治人」を体現した人の一人とみなしていた。小楠も熊本藩の収斂政策を批判し⁵¹⁾、その撤廃を主張したことがある。前述した退野の上申書を読んだことが、そのヒントになった可能性も考えられる。

第三章 小楠が『自省録』から受けた直接的影響

小楠は『自省録』を読むことによって、どのような直接的な影響を受けたのだろうか。本章では、30代から40代初めにかけての小楠の生き方や思想の発展に、『自省録』がどのような影響を与えたかという、「はじめに」で立てた問いに答えていきたい。

小楠が『自省録』から受けた影響を考えるには、まず何よりも「はじめに」で引用した、『自省録』の一節、すなわち、心から世間の一切の利害を解き放てば、学問の本領が立ち、順境、逆境にかかわらず泰然としていることができるという李退溪の言葉に注目する必要がある。この言葉はなぜ小楠にとって重要なものになったのだろうか。

小楠が29歳で藩校の時習館の最上級クラスの居寮長（手当付き）になってから、江戸遊学を経て『自省録』に初めて言及している41歳に至るまでの小楠の動静を手短にまとめ、その上で、先の李退溪の言葉が小楠の思想や人生観の形成にどのような影響を与えたかを考えてみたい。

小楠は長年時習館に学び、優秀さを認められて、29歳のとき最上級クラスの居寮長になった。少年時代から経世の志をもっていた小楠は、居寮長になると、次席家老の長岡監物と連携しながら、早速人材育成の学校にするための改革を試みたが、酒を飲むと言動が激烈になる癖も災いして、居寮生や時習館の保守派教員と対立した。その後、天保10（1839）年3月、31歳の年に江戸遊学の命を受けて遊学した。ところが、江戸藩邸の役人に、過酒のため藩外の者とけんか沙汰を起こしたことが、頻繁に他藩士と交際したことをとがめられて、翌年の天保11（1840）年4月に帰国させられた。

帰藩後、逼塞70日の処分を受け、謹慎しつつ儒学を学び直した。天保14（1843）年35歳の年には、長岡監物ら熊本藩士と、『近思録』などの朱子学の書物を会読し（実学党の濫觴）、私塾を開いた。

小楠にとって、遊学中幕臣や他藩士と交際したことは、視野を広めるまたとない機会であった。前述の事情で、遊学を途中でやめざるを得なくなったのは、不本意であっただろう。遊学の辞退に追い込まれた背景には、小楠が属するとみなされた実学派に対する藩保守派の強い警戒心があった。小楠は時習館改革を巡っても保守派と対立していた。

51) 同書、70-71、73頁。

帰国した小楠は、門を閉ざして学問をし直した。当初は陽明学の本も読んだようだが、その後は集中的に朱子学の本を読んだ。それまでの小楠は、史学を得意とし、現実の政治に並々ならぬ関心をもっていて、朱子学の抽象的な理気論を嫌っていた節がある。帰国後は逆境の中で、世の処し方、内面のあり方に心を向けるようになった。外から内への心境の変化に伴い、小楠は朱子学の自己修養論を受容した。

朱子学を学び直す過程で、小楠は大塚退野の文章や語録を読み、格別な修養の力を感じた。「為己之学」が弘化2（1845）年37歳の年以降、小楠の漢詩や書簡の中で繰り返し唱えられるようになる。

さらに、小楠は『自省録』を読み、一切の利害を度外視して心を煩わさないようにすれば、憂うところは5割から7割解消するだろうという、本稿の冒頭で引用した一節に出会い、なるほどこう生きればいいのだと、得心したと考えられる。その一節は、修養のための学を、「為己之学」よりも、さらに直截に表現したものであり、小楠の心に深く刻まれ、人生訓として門人との別離の際に書き渡されることになった。

逆境の中にあっても後進を励ましつつ朱子学の学びに専念した、大塚退野と李退溪の生き方は、同じく逆境にあった小楠にとって、修養、出处進退の指針になったのである。小楠は、嘉永2（1849）年41歳の年、4月15日付で長岡監物に送った書簡において、己の心境の変化について、「・・・以前之心は世にも人にもと申様成る意思にて御座候処、今日の心は聊相替り何か己を成就せんと思ふ意思に罷成」⁵²⁾と述べ、今日の心の方が良いと思うようになったと語っている。小楠が『自省録』に言及するのは、この書簡を出した年の8月であった。退野と退溪の言説や生き方は、小楠の心境の変化に大きな影響を与えたのではないかと考えることができる。

小楠は43歳以降、『自省録』に言及することはなかったが、一切の利害を度外視せよという退溪の教えは小楠の思想の一部と化し、その後の文章に痕跡を確認することができる。小楠が慶応3（1867）年59歳の年に、福井藩士の松平源太郎に送った「国是十二条」⁵³⁾（時勢の変化に応じた福井藩の施政方針案）の第一条「天下の治乱に関わらず、一国独立をもって本となす。」には、小楠自身によって「自然の天理に則り自然の人事を尽し利害得喪一切度外に付す。この大条理明かなれば吉凶禍福凡そ外事の変態人心を動かすに足らず。その理に従て順応し信義をして天下に明かならん事を欲す。」という説明が付けら

52) 同書、124頁。

53) 同書、89頁。安政元（1854）年3月14日付の福井藩士岡田準介宛の手紙では「平生利害之心断きり此道に打はまり候様に手を付け参り度奉存候。」と書かれている。同書、211頁。また、次の箇所では「利害の私心」の害が指摘されている。同書、144、230、236頁。

れている。ここで下線を引いた箇所は、前述の「世間の窮通・得失・栄辱・利害を將て、一切之を度外に置き」⁵⁴⁾ という『自省録』の一節と思想的に類似している。

さて、『自省録』が小楠に影響を与えたと他に考えられるものとしては、すでに平石直昭が指摘している「朋友講学」の勧めがある。小楠は李退溪と同様に「朋友講学」⁵⁵⁾を重んじており、為政者に対しては、父子や夫婦の間で講学を行い、さらに君臣間で講学し、互いに訓戒し合い、天下政事の得失を話し合うことを勧めている（「学校問答書」）。また講学にあたっては、士、農、工、商、あるいは医師などの職の違いを問わず、道を学ぶ者は皆、士であるとも述べている⁵⁶⁾。人が道を学ぶ際には、身分、職業、社会的立場などは関係なく平等であるというわけである。道の前での平等という考え方も李退溪と同じである。

大塚退野は朋友と講学することの楽しみを述べている⁵⁷⁾が、残された文章や語録には積極的に勧める記述はない。語録の中に「虚心にして相互に講習討論するはこの朋友中のみなり」⁵⁸⁾という言葉が採録されている。「虚心であること」が前提だと考えていたようである。

小楠は天保14（1843）年、長岡監物ら実学党の同志と頻繁に会合し、朱子・呂祖謙編の『近思録』を会読した。会読は章句の解釈のみならず時事にも及んだ。この経験は小楠に朋友講学の重要性を認識させたと考えられる。小楠は後になって会読に参加しなくなった長岡監物に対して、「為己之学」はもちろん大切だが、私見に陥るのを防ぐには朋友との講習が役立つ⁵⁹⁾と述べている。『自省録』を読んで「朋友講学」の重要性について意を強くした可能性も考えられる。

以上のように、小楠が『自省録』から受けた影響として確実なものは、一切の利害を度外視せよという『自省録』の言葉である。他に可能性があるものは「朋友講学」の勧めである。このような言葉に説得力を与えているのは、『自省録』全体から伝わってくる、ひたむきに朱子学を学び、自己修養に努めている李退溪の生きる姿勢それ自体である。小楠

54) 前掲『自省録』、24頁。また、1865（慶応元）年の小楠の談録（元田永孚筆記「沼山閑話」）でも、「・・・天に事ふるよりの外何ぞ利害禍福榮辱死生の欲に迷ふことあらん乎」と、『自省録』と類似した表現が用いられている。前掲『横井小楠 遺稿篇』、924頁参照。

55) 同『横井小楠 遺稿篇』、4頁。次の箇所では同様のことが様々に表現されている。同書、5、124、173、232、881、884、913頁。

56) 同書、725頁。前掲『横井小楠 漢詩文全釈』、532頁。

57) 前掲『肥後文献叢書』、653頁。

58) 「退野先生語録」（写本）無窮会所蔵。

59) 前掲『横井小楠 遺稿篇』、123-124頁。

はそのような生きる姿勢に大きな感銘を受けたと考えられる。

おわりに

本論の第一章では、李退溪の『自省録』がどのような書物であるのかを解説し、第二章では、横井小楠が、李退溪を尊崇した大塚退野から受けた影響を考え、第三章では、30代後半から40代初めにかけてのある時期に『自省録』を読んだことが、小楠の思想と生き方にとって、どのような意味を持つかを考察した。

小楠は、退野からは特に、名声のためではなく自己修養のための学を意味する「為己之学」の教えを受け継いだ。さらに小楠は『自省録』を読み、一切の利害の度外視を勧める一節に出会って、学問の本領はその一言にあると思うようになった。

また、朋友講学の重要性も『自省録』から学んだ可能性がある。

当時熊本藩で、いわば危険人物として疎外されていた小楠にとって、逆境にあっても真摯に学び続けた退野と退溪の生き方は、生きる上での指針ともなった。

退野と退溪から受容したこのような思想や生き方は、小楠の血肉になり、晩年においてもその痕跡をたどることができる。

こうして学問への姿勢や生き方の定まった小楠は、幕末社会の情勢を見聞し、各地の知識人や武士と語らって自らの思想を確かめるために、嘉永4（1851）年43歳の年の2月、7か月に及ぶ上国遊歴の旅に出る。その旅は福井藩士との親交を深める機会になった。福井藩との縁は深まり、小楠は後に福井藩校明道館の賓師になった。また福井藩政特に殖産興業にも関わり、さらに幕府の政事総裁職になった松平春嶽の側近に登用されて一時期幕政にも関与した。

小楠は安政元（1854）年には、水戸藩の徳川齊昭、福井藩の松平春嶽、尾張藩の徳川慶恕（慶勝）ら改革派大名同士の講学⁶⁰を提案している。また安政5（1858）年に明道館の賓師になってからは、頻繁に福井藩士と講学の会⁶¹をもった。小楠にとって朋友講学は学問的活動であると同時に、政治的実践の重要な要でもあった。

文献目録

横井小楠のテキスト

野口宗親『横井小楠 漢詩文全釈』熊本出版文化会館，2011年

山崎正董『横井小楠 遺稿篇』明治書院，1938年

60) 同書，216頁。

61) 同書，270，273-274頁。

李退溪のテキスト

李退溪（難波征男校注）『自省録』平凡社（東洋文庫864），2015年

阿部吉雄編『李退溪全集 日本刻版』上・下 李退溪研究会，1975年

注記 上記全集の上巻に収録されている『朱子書節要』は寛文11（1671）年に日本で返り点をつけて復刻されたものであり，楠本正継は大塚退野の手批本を书写したものと推定している。また，上記全集の下巻に収録されている『自省録』は寛文5（1665）年に日本で返り点をつけて復刻されたものである。

研究書・研究論文

阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会，1965年

阿部吉雄「江戸期の儒書に引用された李退溪「自省録」」『日本中国学会報』第20集，1968年10月

李泰鎮（六反田豊訳）『朝鮮王朝社会と儒教』法政大学出版局，2000年

小倉紀蔵『朝鮮思想全史』筑摩書房（ちくま新書），2017年

岸本美緒，宮島博史『明清と李朝の時代』（世界の歴史12）中央公論社，1998年

北野雄士「大塚退野，平野深淵，横井小楠－近世熊本における「実学」の一系譜－」『大阪産業大学論集人文科学編』第107号，2002年6月（雑誌『別冊 環』第17号に「近世熊本における朱子学の一系譜－大塚退野，平野深淵，小楠」と改題し，大幅に改稿して掲載，藤原書店，2009年11月）

北野雄士「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読－誠意の工夫論を巡って」『横井小楠研究会年報』第2号，2004年9月（雑誌『別冊 環』第17号に「水戸学批判と蕃山講読－誠意の工夫論を巡って－」と改題し，大幅に改稿して掲載，藤原書店，2009年11月）

金明順（金明順訳）『人物でみる韓国哲学の系譜－新羅仏教から李朝実学まで』日本評論社，2008年

楠本正継「大塚退野並びに其学派の思想－熊本実学思想の研究」『楠本正継先生 中国哲学研究』国士舘大学附属図書館，1975年（初出は楠本正継編『九州儒学思想の研究』，1957年）

柴田篤「楠本家三代の家学と退溪学」『中国哲学論集』九州大学中国哲学研究会，31，32合併号，2006年12月

高橋亨（川原秀城・金光来編訳）『高橋亨 朝鮮儒学論集』知泉書館，2011年

鄭鳳輝『朝鮮朱子学と日本・熊本－李退溪と横井小楠を中心に－』熊本学園大学附属海外事情研究所，2004年

- 友枝龍太郎 「横井小楠と朱子学（1）」『韓』第5巻第5・6合併号，1976年6月
- 友枝龍太郎 「横井小楠と朱子学（2）」『韓』第6巻第6号，1977年6月
- 友枝龍太郎 『朱子の思想形成』春秋社，1969年
- 難波征男 「解説 李退溪『自省録』と東アジア体認学」『自省録』平凡社（東洋文庫864），
2015年
- 日本古典学会編 『山崎闇斎全集 上巻』松本書店，1936年
- 平石直昭 「主体・天理・天帝（一）——横井小楠の政治思想」東京大学社会科学研究所
『社会科学研究』第25巻第5号，1974年3月
- 平石直昭 「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想」東京大学社会科学研究所
『社会科学研究』第25巻第6号，1974年3月
- 平石直昭 「横井小楠——その「儒教」思想」相良亨，松本三之介，源了圓編『江戸の思想家たち（下）』研究社出版，1979年